

市民放射線被ばく調査報告会概要

日 時 平成24年1月20日(金) 19時～21時30分

場 所 二本松市安達文化ホール

参加者 市民 400名、報道機関8社(別添資料)

1 開会 井川健康増進課長

2 あいさつ 二本松市長 三保恵一

3 放射線被ばく量(外部・内部)調査結果概要説明、今後の方針 阿部保健係長

4 結果概要に係る講話及び質疑

(1) 放射線被ばく量(外部・内部)調査結果の見方、考え方、今後の注意点等

茨城県立医療大学保健医療学部放射線技術科学科 准教授 佐藤斉先生

【講話概要】

放射性物質の人への影響

- ・小児は大人の2倍の発がん
 - ・内部被ばく、低線量継続被ばくは免疫機能の低下、感染症、貧血の危険性
- 食品に含まれる放射性物質の基準が4月から変わる予定

- ・水 10ベクレル
- ・食品 100ベクレル

今後の対応(内部被ばく)30年後に想定外だったといわないために

- ・食品の安全確認
- ・測定しなければわからない
- ・自治体で検査体制の整備・充実
- ・簡易測定器による水際チェック
- ・5年間は特に注意が必要(天候などによる移動、検査体制)

獨協医科大学国際疫学研究室福島分室 室長(准教授) 木村真三先生

【講話概要】

空間線量の正しい測定方法

- ・地表から1mと10cmで測定
- ・地面に直接置いてはいけない
- ・地表から50cmでの測定は幼児の影響を知る場合に行う
- ・測定機器は汚染を防ぐためビニール等に入れる(使い捨て)

原発事故について

- ・3月12日の爆発は風が陸 海に吹いていたため影響少ない
- ・3月15日の爆発は風向きが北西方向でセシウムが多く流れた
この時にどのくらい外にいたかが内部被ばくの主なもの
- ・3月21日原発からの白煙、灰色煙はいわきの海岸方面に流れた
この中にはヨウ素が多く含まれ、甲状腺がんのリスクが高くなる

外部被ばくの影響

- ・できるだけ被ばくしないほうが良い

- ・細胞分裂の活発な子供のリスクは大人の3倍、新生児は10倍
- ・200人が100 mSv被ばくすると2人ががんを発症し、1人ががんで死亡する。
- ・チェルノブイリの除染作業者123 mSvから白内障の発症がみられる

除染について

- ・広がりを持つホットエリアでは、汚染の高い所のみ除染しても効果が低い
- ・点線源では距離の2乗に反比例する
- ・面線源の場合は散乱線の影響を受け100m先から放射線が飛んでくる
- ・その結果1軒の民家を除染するためには半径100mの除染が必要

森林の除染について

- ・住宅地に近い森林から100m以上を伐採、落ち葉を取り除いた後広葉樹の植林をする
- ・伐採後の木は樹皮と枝は汚染物質として処理を行い、幹の部分は震災復興のため建築材料として使用

ガラスバッチによる放射線積算線量の測定について

- ・他の市町村では1ヶ月の測定もあるが、当市の測定は放射線量の変化があっても平均で被ばくの状態がわかるため3ヶ月継続測定を実施
- ・今回の測定を行ったことで室内での線量が高いマンションの発見ができた

(2) 質疑(質問用紙記入分)

Q.外部被ばく調査の異常者へX線検査を受けた為とあるが、X線で被ばくしたということか？

A.(佐藤先生)X線検査は必要な医療として使用されたものなので、検査を受けた人にメリットがある。胸部X線検査は0.07 mSv、CTは10 mSv以上であるが、今回の事故による被ばくとは別と考えてよい。

Q.放射線の遮蔽は？

A.(木村先生)木造家屋で1/2、鉄筋コンクリート1/5の遮蔽。家では0.5 μSvまでであれば、(木村が考える)耐えうる基準

Q.内部被ばく検査は8歳以下の子供は正確ではない？

A.(佐藤先生)内部被ばくの計算に使用するモデルによるもの。

Q.雪の影響は？

A.(木村先生)大気中に浮遊していないので問題ない。水盤による降下物調査で放射能濃度が高くなると報道があったが、放射性物質の再浮遊がない為、人為的か悪戯と思われる。

Q.一度内部被ばくするとデータは下がらないのか？

A.(佐藤先生)物理的半減期、代謝機能、実効的半減期90日があるため体外へ排出される。